

# 1. 記憶障害の評価とリハビリテーション

布谷 芳久<sup>1)</sup>

記憶障害に関連する機能障害を定量的に評価するため、Serial Position Effect Test (SPET) を考案した。被験者は20個の単語からなるリストを1秒に1個のペースで聞かされ、呈示された順序に関係なくそれらを想起することを要求される。

健常な被験者の場合、リスト内での呈示順が最後に近い単語が中間部の単語よりよく想起される。この現象はこれらの単語が短期記憶からも直接想起されるために生じる。また、中間部の単語の想起率は一定しており、短期記憶から長期記憶への移行機能を反映している。そこで6から10番目の単語、16から20番目の単語想起率をそれぞれ平均化し中間平均想起率 (MRR)、終末平均想起率 (LRR) とし定量的指標とした。また、リストに含まれない単語を想起した回数、重複して想起した回数を1リストあたりに換算し、それぞれリスト外想起度数 (EpL)、重複想起度数 (RpL) とした。

脳損傷患者4名を対象に、SPETと平行して、七語試験、同試験の干渉後遅延再生、WMS

より論理的記憶、対語学習、常識試験、数唱順唱、逆唱、Trail making test A/Bを施行したところ、SPETにおけるLRRは短期記憶 (STM)、MRRは長期記憶 (LTM)、EpLは高次記憶活動 (記憶系の入出力を制御する高次脳機能) の障害を反映しており、記憶障害を呈するいくつかの異なった病態を想定することができた。1) 注意障害型: 感覚情報貯蔵からSTMまでの障害で、SPETではLRRが低下し、これに伴ってMRRも低下。2) 純粋記憶障害型: STMからLTMへの転換障害で、SPETではMRRのみ低下。3) 高次記憶活動障害型: 高次脳機能による記憶系の制御の障害で、今回SPETではRpLがこれを反映した。注意障害型および純粋記憶障害型の症例では、それぞれの機能障害を直接訓練することで記憶障害が改善することを確認できたが、高次記憶活動障害型の症例では、機能障害にたいする方策は未開発で、症例を選んでメモリーノート等の補助具導入の訓練を行い、成果を得ている。

1) 東京専売病院理学診療科